



＜貿易特集＞

令和4年12月15日
名古屋税関 調査部調査統計課

税関 150周年記念特集 <輸出編>



～税関は 150周年を迎えた～



名古屋税関の輸出といえば・・・自動車関係がメインと思われるでしょうが、昔は様々なものが名古屋から世界各地へ輸出されていたことがわかりました。

ということで、およそ100年前の輸出品4品目に焦点を当てた特集記事を作成いたしましたので今とは一味違う名古屋の名産品をご覧ください。

ちなみに、自動車（乗用自動車）の輸出は昭和42（1967）年から現在に至るまで約50年以上、名古屋港における輸出シェア1位を守り続けています！

その前に輸出が始まった頃の荷役作業を覗いてみましょう♪



どのような自動車（乗用車）が全国で作られていたのかな??



三菱A型乗用車 発売1918年11月(発表)
神戸三菱造船所



トヨダAA型乗用車
発売1936年9月(発表)
豊田自動織機製作所



リラー号 発売1923年--月
実用自動車製造



スズライト・セダン 発売1955年10月(発表)
鈴木自動車工業



トヨペット乗用車SA型
発売1947年10月(生産開始)
トヨタ自動車工業

スバル360 発売1958年3月(発表) 富士重工業



ホンダN360 ファミリータイプ 発売1967年3月
本田技研工業



トヨタ2000GT 発売1967年5月
トヨタ自動車工業



ニッサン・スカイライン2000GT 発売1968年10月
日産自動車

カッコいいのが
たくさんあるね



それでは本編をご覧ください。

写真：名古屋市鶴舞中央図書館 所蔵

陶

磁

器



～かつて中部地方の輸出を支えた名古屋陶磁器～

日本には産地の土の持ち味を生かし、その土地の歴史とともに発展してきた伝統的な焼きものの生産地が点在し、様々な陶磁器が作られています。代表的な陶磁器と呼ばれる焼きものは、「美濃焼（岐阜県）・瀬戸焼（愛知県）・有田焼（佐賀県）」など他にも多くあり、経済産業省の「伝統的工芸品」に指定されている陶磁器は、なんと32点（令和4（2022）年11月時点）あります。明治前期の日本では、重要輸出品として特に注目したものの一つに陶磁器があったとされています。日本における陶器・磁器の歴史は古く、その技法や用度、装飾方法や美の視点に至るまで、時代によって多種多様な文化を育んできました。

【大正13（1924）年「大日本外国貿易年表」の輸出品表】

★名古屋港の輸出実績

名古屋 Nagoya.		数量 Quantities. 千円 Yen	價額 Value. 千円 Yen
陶磁器	Potteries	16,822,685

★国別の全国輸出実績 ※一部抜粋

品名及國名 Articles & Countries to which Exported.	大正十三年 1924.		大正十二年 1923.		大正十一年 1922.	
	取量 Quantities. 千円 Thousand yen	價額 Value. 千円 Thousand yen	取量 Quantities. 千円 Thousand yen	價額 Value. 千円 Thousand yen	取量 Quantities. 千円 Thousand yen	價額 Value. 千円 Thousand yen
○陶器及硝子類 Potteries & glass.	25,437	23,400	21,210
支那 China	1,865	1,545	1,547
關東州 Kwantung Province	754	948	850
香港 Hong Kong	713	604	575
英領印度 British India	1,763	1,570
海峡殖民地 The straits settlement	989	586
荷領印度 Dutch India	295	76	34
佛領印度支那 French Indo-China	9	68
露領亞細亞 Asiatic Russia	478	435
比律賓諸島 Philippine Islands	568
暹羅 Siam	195	160	74
英吉利 Great Britain	443	460	586
佛蘭西 France	536	344	309
北米合衆國 United States of America	9,700	8,893	6,335
加拿大 Canada	745	750	1,072

名古屋港からの陶磁器の輸出価額は、

16,822,685円であり、全国の陶磁器輸出価額 25,437,000円に対し大半を占めていることが分かります。

また、国別の全国輸出実績では、主にアメリカへ輸出されておりました。

【陶器の日】

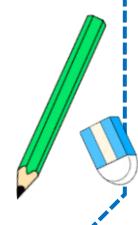
10月4日は「陶器の日」（古代では陶器を陶磁と呼んでいたため。）昭和59（1984）年に陶器の町として知られる愛知県瀬戸市が提唱し、日本陶磁器卸商業協同組合連合会によって制定されました。

陶器と磁器の違いとは！？

出典元：日本陶磁器卸商業協同組合連合会
「やきものハンドブック」



<u>原料</u>	粘土が主	陶石を粉碎した石粉が主
<u>素地</u>	焼きが柔らかく、質が荒い多孔質。 淡い色から黒色まで多様な色	焼きが硬く、質が緻密で気孔は少ない。 純白色
<u>焼成温度</u>	1,100~1,250°C	1,200~1,300°C
<u>叩いた音</u>	低く濁った音	金属的な澄んだ高い音
<u>透光性</u>	なし（光が透き通らない）	あり（光が透き通る）
<u>吸水性</u>	あり	なし
<u>破碎面</u>	破片は不透明で土状	破片は白色でガラス状
<u>ルーツ</u>	朝鮮（日本では各地）	中国（日本では有田）
<u>柄色合い</u>	素地の土の風合いを生かした色のほか、焼成や釉掛けで多様な表現	無地のものから鮮やかな絵付けをしたものまで多種多様



名古屋陶磁器の歴史

明治10年代、神戸、横浜などの外国商館（貿易商）からの要望に応え、瀬戸、美濃から仕入れた素地に上絵付けを施し、日用食器として輸出する。これが名古屋における陶磁器輸出・加工完成業の歴史の始まりでした。

素地の供給源である瀬戸、美濃との近接、当時の主要船積み港である四日市港と水路でつながる堀川などの好立地を背景に、大正から昭和にかけて、名古屋は名実ともに輸出陶磁器の最大生産地、集積地としての地位を固めていきます。

同時に、陶磁器業の隆盛とともに名古屋に集まった、九谷、京都など全国の優秀な絵付け職人は、それぞれ身に付けた伝統技法だけでなく、世界の陶業先進国にも学んでその成果を製品に反映させ、多彩な技法であらゆる市場ニーズに応える、近代産業としての「名古屋絵付け」を確立したのでした。

【「名古屋絵付け」の代表的な2つの技法】

凸盛り（盛り上げ）

台白と呼ばれるクリーム状の絵具（泥漿）を真鍮製の先金「イッキン（絞り出しの道具）」で装飾。

立体的に盛り上がるのが特徴。



ガラス盛り（コラレン）

ガラスの粉を定着させた技法、焼成が難しく高い技術が必要。焼き上がった製品はガラス粉が美しく輝く。

光の角度で色が変化し立体的に見える。



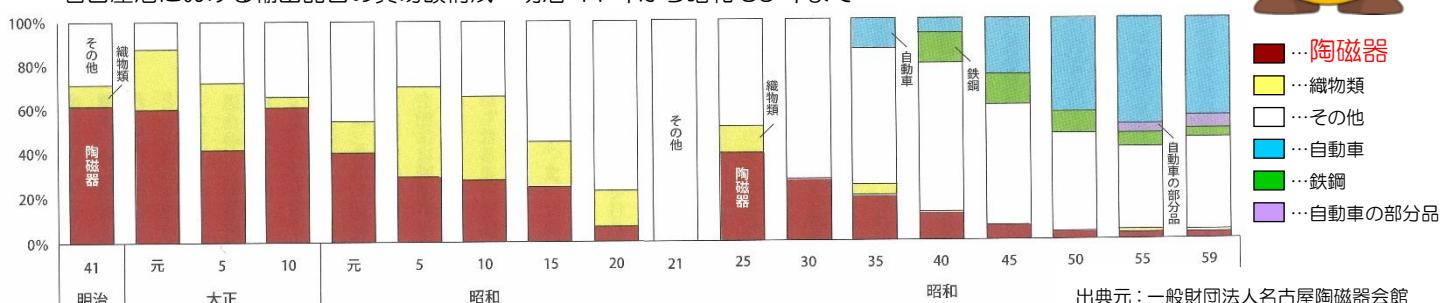
出典元：一般財団法人名古屋陶磁器会館「名古屋陶磁器会館収蔵品図録」

◆資料編

名古屋の産業は高度成長期を経て、軽工業から重工業中心へと完全に変化していくことになり、それに伴い、総輸出額は拡大していました。その時期、名古屋の陶磁器産業は最盛期を迎えるものの、産業としての重要度はかなり低くなっていましたということになります。



名古屋港における輸出品目の貿易額構成 明治41年から昭和59年まで



出典元：一般財団法人名古屋陶磁器会館

「名古屋絵付け物語」

陶磁器製品の種類によって業界の状況は異なりますが、生産量が最盛期から大幅に減少した分野も、ここ数年は若干上向きとの話を聞くようになりました。成熟産業とはいえ日々技術開発が続けられております。これをきっかけに、名古屋陶磁器などの、やきもの文化の魅力をより深く知るきっかけをしていただければ幸いです。



冰砂糖

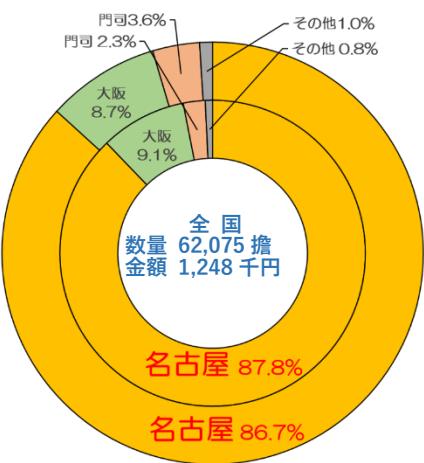


～名古屋港からの輸出金額・数量ともに全国シェア約9割
『氷糖生産の中心地』だった～

約100年前、名古屋港が氷砂糖の輸出シェア9割近くを占めていたことをご存知でしょうか？

大正14（1925）年の主な輸出先は支那（現在の中国）と閩東州（現在の中国遼東半島付近）で大半を占めています。

大正14年 氷砂糖輸出（港別）



内円：数量（擔）
外円：金額（千円）

輸出品表（全国）

品名及國名 Articles & Countries to which Exported.	大正十四年 1925.		大正十三年 1924.		大正十二年 1923.	
	数量 Quantities,	價額 Value, 千円 Thousand yen	数量 Quantities,	價額 Value, 千円 Thousand yen	数量 Quantities,	價額 Value, 千円 Thousand yen
	手 円 Yen	手 円 Yen	手 円 Yen	手 円 Yen	手 円 Yen	手 円 Yen
氷砂糖 Sugar, rock candy.	※1 擠 Picul	62,075 ※2 1,948	27,398	625	× 10,519	227
支那 China	20,444	441	3,757	92	1,635	37
閩東州 Kwantung Province	41,460	800	23,484	526	8,781	185
比律賓諸島 Philippine Islands	14
北米合衆國 United States of America	68	2	63	2	29	1
加拿大 Canada	12
布哇 Hawaii	79	2	75	2	55	1

※1：擔（たん）重量単位。1擔は約60kg。

※2：1,948と記載されていますが正しくは1,248だと考えられます。

輸出品表（名古屋港）大正14（1925）年

名古屋 Nagoya. 内國產 Japanese Produce & Manufactures.	數量 Quantities,		價額 Value, 千円 Yen	
	手 円 Yen	手 円 Yen	手 円 Yen	手 円 Yen
氷砂糖 Sugar, rock candy	54,498		1,082,600	

歴史

- 原産地は中国で2000年位前から存在したと伝えられている。できるまでに多くの日数を要したことから相当な貴重品扱いをされていた。嫁入り荷物の一つに数えているくらいであった。（老酒に入れて飲む）
- 奈良時代に中国より伝来する。（結晶は粗雑で色は飴色）
- 明治初期には、大阪で「鉢氷」が作られるようになる。
- 明治16（1883）年 静岡県森町で現在のような純白透明な氷砂糖が作られ、製造法が確立した。

～以後、国内各地で家内工業として急速に製造業者が増える。～

- 昭和の初めころ、クリスタル氷糖が出現した。
- 昭和15（1940）年に、静岡県3社、愛知県3社、東京都、大阪府、兵庫県各1社ずつが参加して大日本氷糖工業組合が結成された。組合事務所は浜松に所在し、この時代の氷糖生産の中心は浜松でした。

特徴

- 純度が高く、ショ糖分が100%近い自然食品（原料は「サトウキビ」と「テンサイ」）
- 品質がとても安定しているため、長期保存が可能で、賞味期限はない
- 唾液の分泌を促す
- 疲労回復：不純物のない氷砂糖はカロリーが高く（100g中に400キロカロリー）、短時間で体に吸収されるため、疲労時には素早く栄養補給することができる



戦前、戦中は軍需用の携帯食料としても利用



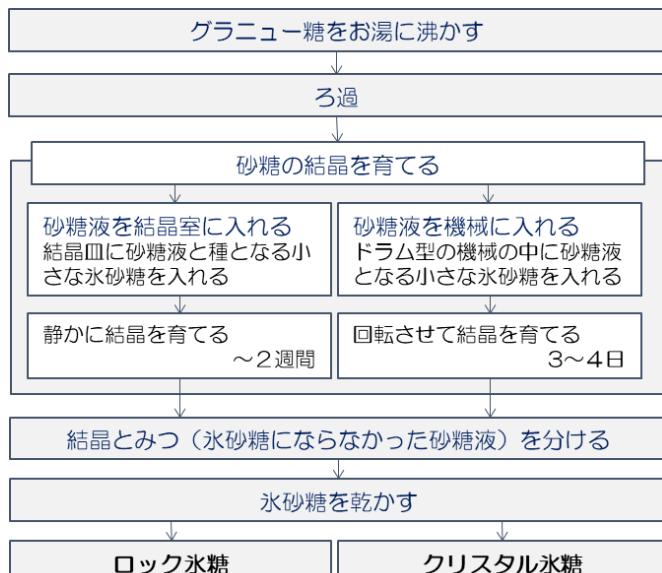
上記の特徴と固形で携帯に便利なため、袋に入れて持ち運び軍需用として利用されていました。戦前には生産量の40~50%が輸出されており、戦時中には、製造された氷砂糖の大部分は軍需に供されていました。

昭和12(1937)年頃、
軍需用として陸軍に納入した時の紙袋です。
『大阪陸軍糧秣支廠買上』と記されています。

❀❀❀ 製 法 ❀❀❀



明治・大正時代に使用されていた
鋳物製の結晶皿。熱源は炭火を使用。



❀❀❀ 種 類 ❀❀❀

ロック氷糖

- 昔ながらの製法で、ひと粒ひと粒の形が違い結晶の粒が大きい
- クリスタルよりも水に溶けやすい
- 2週間かけてゆっくり結晶化
- 多くは果実酒を作る際に使用される



クリスタル氷糖

- ほぼ十六面体の結晶で粒がそろっている
- 大量生産が可能
- 3~4日で結晶化
- 子供のおやつ



氷砂糖は、家庭では梅酒などの果実酒を作る時には欠かせない材料であり、和菓子などのスイーツにも使われていますが、非常食の「カンパン」の中にも入っていることを知っている人は少ないのではないでしょうか。

すっきりとした甘みで、砂糖よりゆっくり溶け、溶け残りがない氷砂糖。非常食としてだけではなく、おいしい果実酒やスイーツでおいしさを堪能したいですね。

取材協力 中日本氷糖株式会社

扇子

～平安時代から輸出！？名古屋が誇る伝統工芸品～

日本の扇子の二大産地をご存じでしょうか？一つは古都 京都、もう一つはここ**名古屋**となっています。その名も「**名古屋扇子**」と呼ばれ、名古屋の伝統工芸品のひとつにも挙げられており、その歴史は古く、約270年前に製造が始まったと伝えられています。

名古屋 Nagoya.	内國產 Japanese Produce & Manufactures.	數量 Quantities.	價額 Value.	圓 Yen
				Gross
屏風	Screens	68	
鞄、提橐、旅櫈及鞞袋類(革製)	Portmanteaus, trunks, bags, knapsacks, etc. (leather)	332	
同(其他)	Portmanteaus, trunks, bags, knapsacks, etc. (other)	30	
貨幣入	Purses	哥 Gross	2	188
扇子及團扇	Fans & round-fans	千个 Mille	1,147	34,597
造花	Artificial flowers	6,514	
雑具(セルロイド製)	Toys, celluloid	1,088	
口 <small>ノ</small> 、 <small>ノ</small> 、 <small>ノ</small>	Tava, india rubber or gutta percha			5,735

大正13（1924）年の大日本外国貿易年表をみるとすでにその輸出が記録されており、名古屋港からは**約114万本**もの扇子（うちわも含む）が輸出されました。

当時の主な仕向地はオーストラリアやアメリカ西海岸地域であり、はっきりとした絵柄のデザインが人気で、室内等に飾られていたとのことです。また、高価のものではなく、お土産用品としても販売されているような手頃な価格帯の扇子が主に輸出されていたようです。



(表)



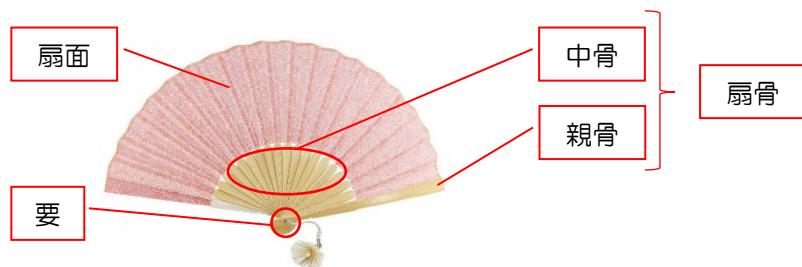
(裏)

大正時代に輸出されていた扇子
資料提供元：末廣堂

○扇子の構造

扇子は、「扇面」「扇骨」「要」によって構成されています。

扇面は紙や布等が使用され、イラストなどが描かれる部分となります。扇骨は両端の丈夫な「親骨」と内側のしなやかで薄い「中骨」で構成されており、扇子は親骨の寸法と扇骨の本数（間数）によって規格化されています。要は親骨と中骨を一点で留める部分であり、ここが壊れると扇子自体が崩壊する重要な部分となることから、「肝心要」の語源となっているそうです。



★発祥は日本！？扇子の歴史★

扇子が日本で発明されていたことはご存じでしょうか？平安時代初期に檜の薄板で作られた檜扇（ひおうぎ）が原点とされ、それほど遅れることなくして、竹の骨に紙を貼って作られた蝙蝠扇（かわぼりおうぎ）が現在の扇子の原型といわれているようです。平安時代末期には中国に輸出されるほど生産が盛んとなり、16世紀にはポルトガルやスペインにも伝わり普及したようです。



(檜扇)



(蝙蝠扇)

資料提供元：名古屋扇子製造組合

★名古屋扇子★

名古屋扇子は宝暦年間（1761年～1764年）に京都から移住してきた井上勘造親子によって始められたと伝えられています。名古屋扇子は男物や祝儀扇といった量産品を主体として発展し、明治時代から朝鮮半島や中国向けに輸出が始まり、大正時代には贈答品の代表的なものとして広く利用され、年1,000万本以上の生産高をあげていたそうです。

戦後、円相場の切り上げや冷房設備の普及により国内外の需要が減少したものの、最近では日本文化の見直しとともに若年層にも扇子が受け入れられ、贈答用やイベント用など需要が拡大しつつあるようです。



現代の名古屋扇子

資料提供元：名古屋扇子製造組合

クイズ この扇子はどの扇子？

扇子は暑いときに仰ぐだけでなく婚礼用や祝儀用、将棋や囲碁の棋士用、落語家用のものなど多くの場面で使用され、それぞれの用途によって親骨の長さと扇骨の本数が決まっており「○寸○間※」と表現されています。例えば婚礼時の和装用の扇子は「9寸11間」囲碁の棋士用は「8.5寸16間」となっているようです。

では、次の用途で使用される扇子の規格はどれになるのでしょうか？正解を選んでみましょう！

※1寸は約3cm 間は扇骨の本数の単位となります。

＜問題＞

1. 婚礼時のモーニングコート用の扇子
A: 8寸16間 B: 7寸15間 C: 7寸13間
2. 将棋の棋士用の扇子
A: 6寸15間 B: 8寸15間 C: 8.5寸13間
3. 落語家用の扇子
A: 7.5寸15間 B: 9寸15間 C: 8.5寸15間



【取材協力先】

名古屋扇子製造組合

未廣堂 (順不同)

ビール



～昭和初期は名古屋港からの輸出金額・数量ともに全国第1位！～

働いた後の楽しみとして、日本でも定着しているビール。外国産や国産など様々な種類のものが、自宅や居酒屋など様々な場所で飲まれています。そんなビールは約100年前にはすでに輸出されていました。

麥酒	名古屋 Nagoya.	内國產 Japanese Produce & Manufactures.	數量 Quantities,	價値 Value.
			石 Ton	円 Yen
麥酒	Beer		23,306	2,536,092

昭和3（1928）年の名古屋港の品別表には、「麥酒」という文字が確認できます。「麥」は、あまりなじみのない字となっていますが、これは、「麦」の旧字なので「麦酒」となります。また、英語表記部分に「Beer」と記載があるので、ビールであることが分かります。当時の輸出量は、数量は23,306石（約420万ℓ）、金額は2,536,092円となっています。

昭和3（1928）年頃、名古屋市内にもビール工場があり、名古屋港からの輸出は数量、金額ともに全国第1位！を占めており、主に中国やインドネシアに多く輸出していました。

*1 石…約180.4ℓ

～昭和の輸出用ラベル～

昔の輸出用ラベルは、各国・地域や代理店ごとにブランド名を変えていたものもありました。



1933年頃「DOLLY BRAND」
：コロンボ（スリランカ）向け



1933年頃「TJAP DARES」
(フクロウ)：メナド・スマラン（インドネシア）向け



1933年頃「SHIP BRAND」：
コロンボ（スリランカ）向け

出典元：キリンホールディングス株式会社

昔のビールは高級品？日本へのビールの普及

昔の日本ではビールはどのように飲まれていたのでしょうか。明治時代は外国人や富裕層が主だったようですが、大正から昭和初期にかけては「カフェー」や「ビアホール」が開店し、徐々に飲まれるようになり、その後家庭でも飲まれるようになっていきました。

一方で、昭和初期頃のビールの値段は、**大瓶1本で30銭～40銭**という価格であり、当時の一般企業の課長クラスが月給100円程だったことから、ビールはそれほど気楽には飲めない高級品だったようです。

日本で広く一般的にビールが飲まれるようになったのは戦後の高度経済成長期で、この時期に電気冷蔵庫が普及することにより家庭の晩酌にビール、という文化が浸透していきました。



昭和初期（1932年頃）の
ポスター
出典元：
サッポロビール株式会社

明治時代からのビールの味の変化

幕末期、日本にビールが輸入してきたときは香り高いイギリスのエールタイプが多かったようですが、段々と日本人好みに合う淡泊なドイツ風のラガータイプが主流になっていったようです。

～ビールの味が変化した理由～

明治期のラガービールの味の特徴をまとめると、苦みと風味の強いまつたりとした赤いビールだったことになる。もし現代人がこれを飲むと清涼感に欠けると感じるだろう。1926（大正15）年に完成したキリンビール横浜工場では、技術革新によって、現在のような黄金色のビールがつくられた。ただ、麦芽やホップの使用量は現在より多く、芳醇で濃厚な味であった。

それから十数年後、原料不足からビールの味は変わり始める。1940（昭和15）年、酒税法改正によってビールの原料にでんぷん類の使用が認められた。ドイツではビールの原料は麦芽、ホップ、水だけとされているが、国内では遅くとも明治30年代には副原料として米が使用されていた。1940（昭和15）年の法の改正は、米不足のため米以外のものを副原料とすることを推奨するものだった。また、副原料の使用量は、法改正前は麦芽の重量の10分の3までとされたが、改正後は2分の1までとなった。

1944（昭和19）年には原料事情がより逼迫して米が使えなくなり、麦芽とでんぶんによるビールづくりが行われ、麦芽の使用量も減少した。その結果、日本のビールの味はすっかり淡白になってしまった。しかし、この淡白なビールは配給によって多くの人に飲まれるようになった。その味を人々が親しんだためか、戦後に原料の制約がなくなっても明治時代のような濃厚なビールはつくられなかった。またホップの使用量も戦前よりも少なくなった。

（キリンホールディングス株式会社ホームページより一部抜粋）

戦争の影響等もあり、昭和初期に比べてビールの味は段々と薄くなっていますが、すっきりとした味を好んでいた日本人には受け入れやすい変化であり、この傾向は戦後も続いたようです。

現在は、クラフトビールや地ビールなど多種多様な味が広く浸透しており、100年後の日本人はいったいどんな味のビールを飲んでいるのか想像してみるのも良いかもしれませんね。

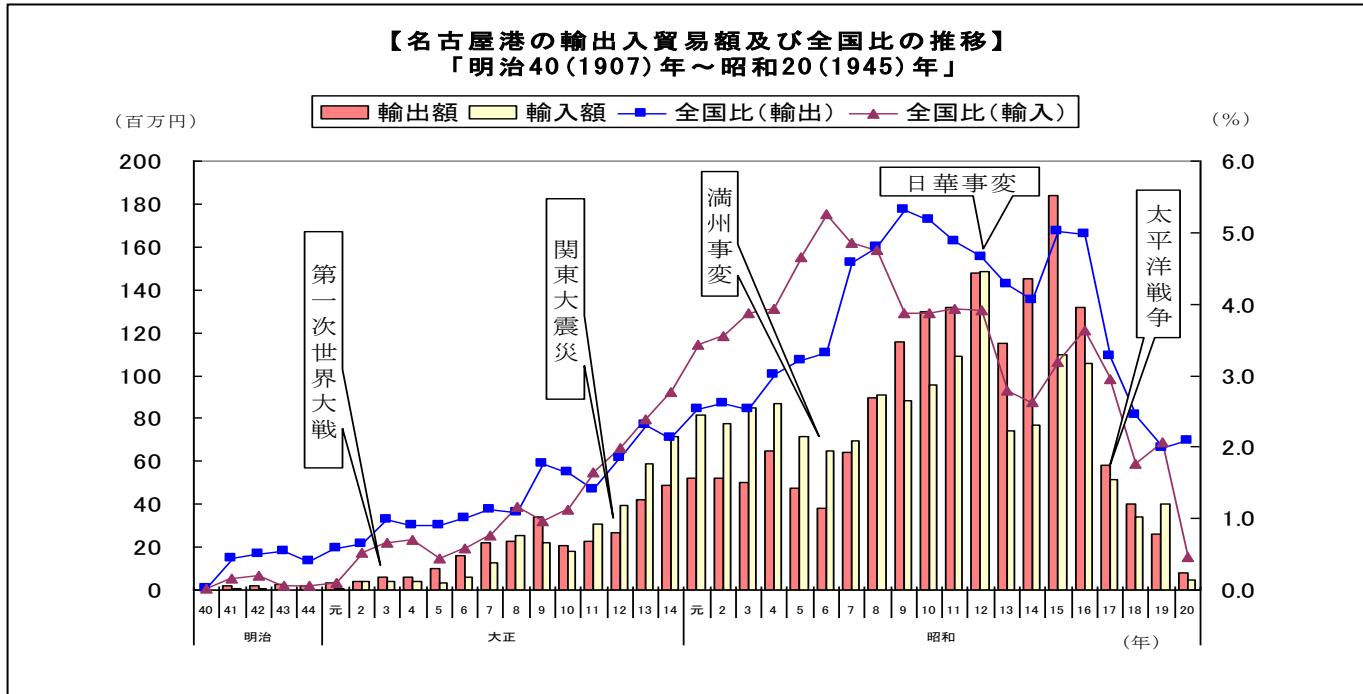
取材協力先：ビール酒造組合、キリンホールディングス株式会社、サッポロビール株式会社、
アサヒグループジャパン株式会社（順不同）

参考ホームページ：キリン歴史ミュージアム（<https://museum.kirinholdings.com>）

*画像の使用につきましては出典元への確認をお願いします。

□ その他の参考資料 □

【名古屋港の輸出入遷移（明治40年～昭和20年）】



【経済価値遷移】

	大正 11 年	昭和 12 年	昭和 47 年	令和 3 年
白米 10kg	3 円 4 銭 (12,000 円)	2 円 40 銭 (6,000 円)	1,860 円 (7,812 円)	4,200 円
大卒初任給	50 円 (20 万円)	73 円 (18 万 2,500 円)	42,744 円 (18 万円)	22 万円
そば	7 銭 (280 円)	10 銭 (250 円)	100 円 (420 円)	690 円
コーヒー	10 銭 (400 円)	15 銭 (375 円)	100 円 (420 円)	500 円

※ () 内の金額は現代換算額

大正 11 年 : 1 円 = 4,000 円、昭和 12 年 : 1 円 = 2,500 円、昭和 47 年 : 1 円 = 4.2 円として計算。

消費者物価指数等を参考に算出した推計値

参考資料：総務省統計局「日本長期統計総覧」、東洋経済新報社「昭和国勢総覧」、週刊朝日編「値段史年表 明治・大正・昭和」、週刊朝日編「戦後値段史年表」、厚生労働省「賃金構造基本統計調査」他

【大正 11 (1922) 年当時、日本と貿易をしていた国・地域の一部】

当時の国・地域名	英語表記	現在の国・地域名
海峡植民地	The straits settlement	シンガポール、マレーシアの一部
暹羅	Siam	タイ
北米合衆国	United States	アメリカ合衆国
香港	Hong Kong	香港
白耳義	Belgium	ベルギー
チエツコ・スロヴァキア	Czechoslovakia	チェコ、スロバキア
亞爾然丁	Argentine	アルゼンチン
布哇	Hawaii	アメリカ合衆国 (ハワイ州)
埃及	Egypt	エジプト
諾威	Norway	ノルウェー

★名古屋税関が全国シェアNO.1★

名古屋税関管内の主要輸出品と言えば、「自動車」「自動車の部分品」ですが
名古屋税関が輸出額全国シェア1位の品目はそれだけではないのです！



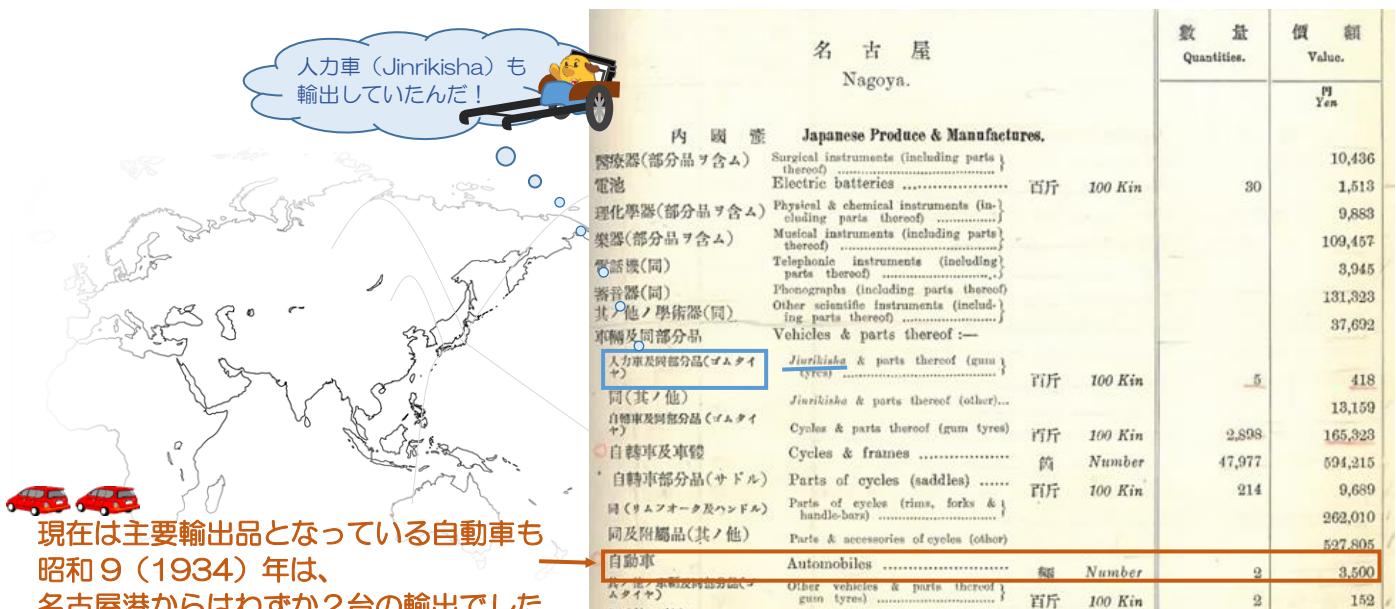
品目(概況品)	全国比(%)
タイル	98.9
自動車の部分品	67.9
楽器	64.9
航空機類	57.8
自動車	49.3
茶	48.9
金属加工機械	46.0
二輪自動車類	44.7
刃物	40.3



2021年実績

名古屋税関管内の5県には、「自動車」「自動車部品」だけでなく「タイル」「お茶」「刃物」「楽器」などの、国内有数の生産地があります。また、「アジアNo.1 航空宇宙産業クラスター形成特区」に指定され、航空宇宙産業の一大拠点にもなっています。それぞれ、輸出額が**全国シェア1位**となっており、貿易統計は地域産業や伝統産業と大きく結びついています。

名古屋税関管内の主要輸出品も100年ほど前の陶磁器、織物類から、伝統や技術を引継ぎながら、自動車や航空機産業、機械工業と変化をしてきました。



現在は主要輸出品となっている自動車も
昭和9(1934)年は、
名古屋港からはわずか2台の輸出でした。

100年後には、伝統を生かしつつ、最新技術と融合した新たな産業が発展し、
名古屋税関の主要輸出品も大きく変化しているかもしれません。

※本資料を引用する場合は、名古屋税関の資料による旨を注記してください。

※本資料に関するお問い合わせは、名古屋税関 調査部 調査統計課 (TEL052-654-4176)までお願いします。

また、貿易統計は名古屋税関HPでもご覧いただけます。《 <https://www.customs.go.jp/nagoya/> 》